



広島と 長崎

1945年8月、アメリカ合衆国が日本の広島と長崎に投下した二発の核爆弾によって、25万人を超える人びとが命を奪われました。これは、戦争において核兵器が使用された、最初であり唯一の事例です。

多くの人びとが瞬時に焼き尽くされました。また他の人びとは、激しいやけどや爆風による負傷、急性放射線障害によって、数時間後、数日後、あるいは数週間後に、苦しみの中で命を落としました。さらに、放射線によるがんやその他の病気によって、その後何年にもわたり多くの人びとが亡くなりました。

このような惨劇を二度と繰り返さないために、各国は緊急性をもって核兵器の廃絶に取り組まなければなりません。

広島と長崎では、目の前に広がる光景は、まさにこの世のものとは思えないものでした。校庭には、亡くなった子どもや、苦しむ子どもたちが散乱していました。母親たちは動かなくなったわが子を抱きしめていました。内臓が露出し、皮膚が垂れ下がったままの人びとの姿も見られました。

爆心地

それぞれの都市において、爆発の中心地点に最も近い場所である爆心地にいた人びとは、生き延びる可能性はほとんどありませんでした。爆心地から半径約1.2キロ以内において、爆発の影響から遮られていなかった人びとのほぼすべてが、即死、あるいは数週間以内に命を落としました。

爆心地の地表温度は摂氏3,000度から4,000度に達し、最大で約3.5キロ離れた場所にいた人びとでさえ、やけどを負いました。また、強力な衝撃波によって、半径約2キロ以内の木造建築の大部分が破壊されました。

さらに、爆心地から1キロの距離であっても、人びとは急性放射線症によって命を落とすほどの高い線量の電離放射線を浴びました。そして、さらに遠く離れた場所にいた多くの人びとも、放射線被ばくの後遺症によって命を落としました。

病院の多くは倒壊し、医療物資も失われ、医師や看護師の多くが命を落とすか負傷していたため、多くの人びとは、苦しみを和らげる手当を受けることもできないまま亡くなりました。その後、救援のために街に入った人びとも、残留放射線によって命の危険にさらされました。

犠牲者の大多数となる9割以上は民間人であり、その中には約3万8千人の子どもたちが含まれていました。広島では、当時約8,400人の中学生が、防火帯をつくる作業のため屋外に出ており、そのうち6,300人が命を落としました。

原爆投下後

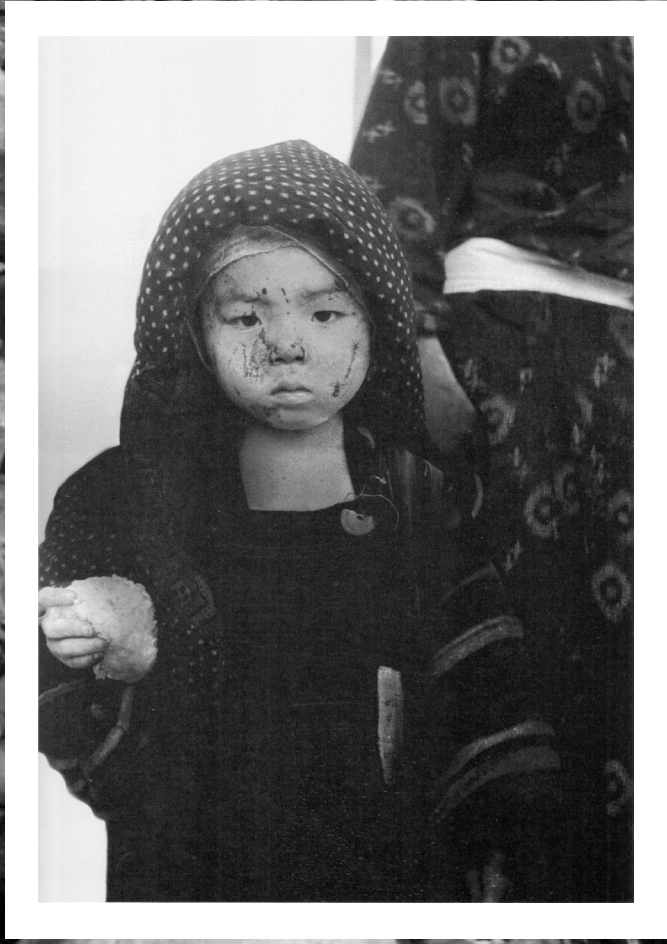
原爆投下後の混乱の中で、親はわが子を、子どもたちは親を、必死に探し続けました。愛する人の焼け焦げた遺体や、身の回りの品だけを見つける人もいれば、

何ひとつ手がかりを見つけられないままの人もいました。

家族を再び引き合わせようとする試みは、さらに困難を極めました。多くの人びとが、あまりにも深刻な傷を負っており、見分けがつかないほどであったためです。



原爆投下から1か月後の長崎。出典：アメリカ政府
長崎で、原爆投下後に配給された食料を受け取る少年。出典：山端庸介



伸一さんの三輪車

広島への原爆投下時、当時3歳の鍔谷伸一さんは、自宅の外で、いちばん好きだった三輪車に乗って遊んでいました。

彼は全身にやけどを負うなどの重いけがをし、数時間後に命を落としました。

姉の路子さんと洋子さんもまた、命を奪われました。

父親は後年、次のように語っています。「こんなことは、子どもたちに二度とあってはなりません。子どもたちが心ゆくまで遊べる、平和な世界をつくるために、どうか力を尽くしてください。」

伸一さんの焼け焦げた三輪車は、現在、広島平和記念資料館に常設展示されており、さらには、それをもとにした彫刻が、ジュネーブの国際赤十字・赤新月博物館に設置されています。

この彫刻は核兵器による攻撃において子どもたちが受けた苦しみを伝える、深い象徴となっています。



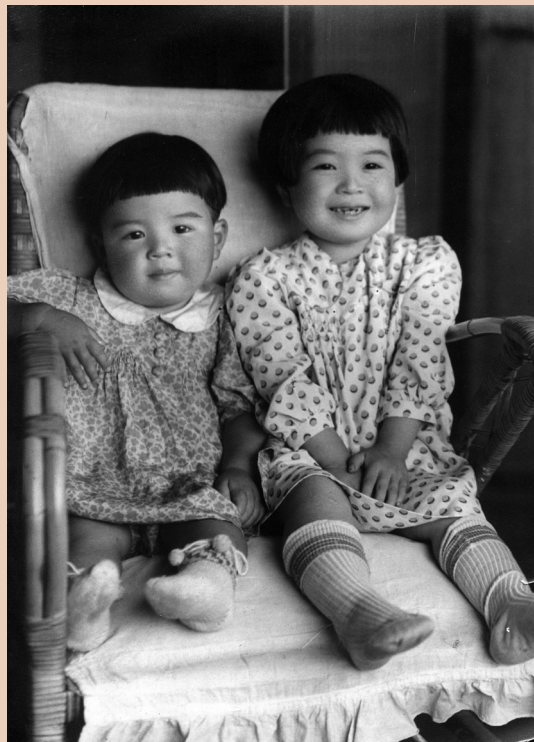
出典：広島平和記念資料館（寄贈：鍔谷信夫）

広島の子供たち

2歳の綿岡公乃さんと、5歳の姉である裕乃さんは、広島への原爆投下時、両親とともに自宅にいました。家族4人、全員の命が奪われました。

もう一人の姉である香代子さんも、爆心地の近くにおり、命を落としました。生き残ったのは、長女の智津子さんただ一人でした。

この写真は、公乃さん(左)と裕乃さん(右)が写っており、原爆投下のわずか1日前に撮影されたものと考えられている。出典：岩田美穂



放射線にさらされて

広島に原爆が投下されたとき、池本徹さんは7歳、姉のアイ子さんは9歳でした。二人とも屋内におり、爆心地からおおよそ1キロの場所にいました。

原爆投下から4～5日後、髪の毛が抜け始め、発熱や歯ぐきからの出血といった、急性放射線症が現れました。

二人とも急性期の症状からはいったん回復しましたが、最終的には放射線の後遺症によって命を落としました。徹さんは11歳で、アイ子さんは29歳で亡くなりました。

1945年10月、広島赤十字病院にて撮影された、兄妹の徹さん(左)とアイ子さん(右)。出典：菊池俊吉



被爆者

広島と長崎への原爆投下を生き延びた人びとは、日本語で被爆者と呼ばれるようになりました。

多くの人びとは、生涯にわたり、傷による痛みや不調に苦しみ、心の深い傷も抱え続けました。身体や顔に厚い瘢痕(はんこん)が残ったり、ガラスの破片が体内に深く刺さったまま、何十年も生き続けた人もいました。

女性たちは、原爆による遺伝的な影響が、子どもや孫に受け継がれるのではないかという不安が社会の中に広がっていたため、とりわけ大きな困難と偏見に直面しました。

原爆投下から数年のうちに、多くの被爆者は放射線の後遺症により、がんやさまざまな病気の発症率が著しく高まりました。とりわけ初期には、白血病が多く見られました。

核兵器の危険性を世界に伝えるため、多くの被爆者が、1945年に起きた出来事について、自らの体験を語り続けてきました。当時子どもであった人びとの中には、今もご存命の方もおり、被爆体験を語る活動を続けています。

彼らのメッセージは、長年にわたり一貫しています。核兵器と人類は、共存できないということです。

2024年、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)は、「核兵器のない世界の実現に向けた取り組みと、証言を通じて核兵器が二度と使用されてはならないことを示してきた」功績により、ノーベル平和賞を受賞しました。

被爆者たちの勇気ある、そしてたゆむことのない訴えは、世界中の多くの人びとに影響を与え、核廃絶に向けた運動へと人びとを導いてきました。

反核活動家、被爆者

長崎への原爆投下時、谷口稜曄(すみてる)さんは16歳でした。谷口さんは、「爆発の閃光とともに、自転車に乗っていた私は後ろから吹き飛ばされ、地面にたたきつけられました」と語っています。

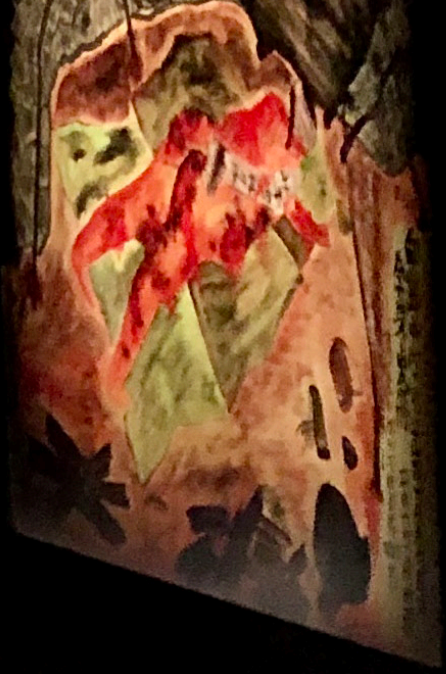
顔を上げると、ほんの少し前まで周りで遊んでいた子どもたちが、すでに命を落としているのを目の当たりにしました。

爆心地から約2キロの場所にいたにもかかわらず、谷口さんは背中、左腕、左脚に重いやけどを負いました。傷はやがて感染し、回復のために約4年間入院することとなり、21か月間はうつ伏せのままで過ごしました。

その後も、傷による痛みが消えることはありませんでした。彼はその生涯の多くを、核兵器の廃絶に向けた活動に捧げました。

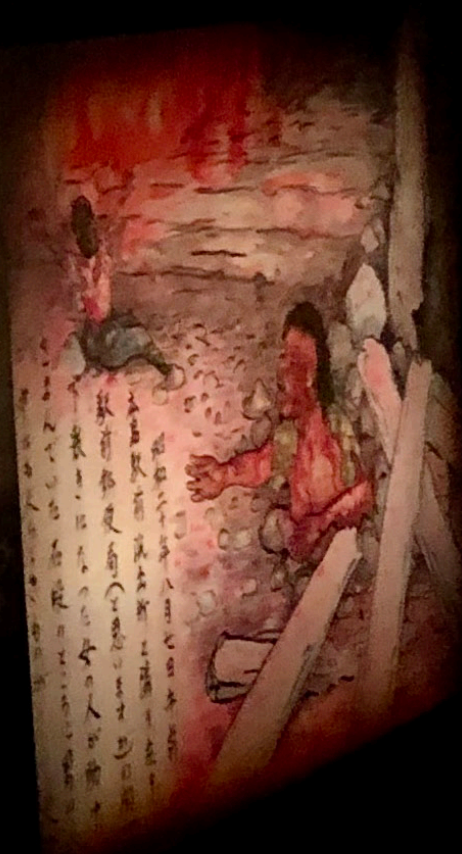


長崎の原爆による傷跡が背中に残る自身の1946年の写真を見つめる谷口稜曄さん。
出典:中尾由里子



「しばらくして、私は防空壕の外をそっとのぞきました。すると、校庭のあちこちに人びとが倒れているのが見えました。地面は、ほとんど一面、横たわる人びとの身体で覆われていました。その多くはすでに亡くなっているように見え、動く気配はありませんでした。しかし所々で、足をばたつかせたり、腕を持ち上げたりしている人の姿もありました。」

辻本 一二夫さん、5歳、長崎



広島平和記念資料館の展示。